

理学療法学専攻大学生における学業的援助要請と 心理特性および学業成績との関連

The relationship between academic help-seeking and psychological characteristics and academic performance in medical college students

野中嘉代子¹⁾ 坪内優太¹⁾ 大田瑞穂¹⁾ 齊藤貴文¹⁾

Kayoko NONAKA, RPT, MS¹⁾, Yuta TSUBOUCHI, RPT, PhD¹⁾, Mizuho OTA, RPT, MS¹⁾
Takafumi SAITO, RPT, PhD¹⁾

1) Faculty of Rehabilitation, School of Physical Therapy, Reiwa Health Sciences University

Rigakuryohogaku Kyoiku 7(1): 7-14, 2023. Submitted Sep. 13, 2023. Accepted Nov. 20, 2023.

ABSTRACT: [Purpose] The purpose of this study was to exploratively investigate the association between the combination of adaptive and dependent request scores with psychological variables and academic performance according to the individuals who requested help-seeking (friends or teachers). [Subjects and Methods] The participants were first-year students in the Department of Physical Therapy at A University. Psychological variables including academic help-seeking, self-regulation learning strategies, cooperative work recognition, and self-control were investigated using a web-based questionnaire. Grade point average (GPA) of the first semester examinations in 2022 was used for academic performance. Students were classified into four groups (low adaptive/high dependence, low adaptive/low dependence, high adaptive/high dependence, and high adaptive/low dependence) based on the median scores of their adaptive and dependence needs toward friends and teachers and examined their relationships with each psychological scale and academic performance. Statistical analyses were performed using one-way ANOVA and the Kruskal-Wallis test, and multiple comparison tests were conducted between the four groups using the Bonferroni method. [Results] The results of the request for help-seeking to friends showed significantly higher values for effort adjustment, monitoring, and cognitive strategies among the "high adaptive/low dependence" and "high adaptive/high dependence" groups compared with the "low adaptive/high dependence" group. Self-control was significantly higher only among the "high adaptive/low dependence" group compared with the "low adaptive/high dependence" group. GPA was significantly higher among the "high adaptive/low dependence" group compared with the other three groups. The results of the request for help-seeking to teachers showed that only the self-control of the other three groups was significantly lower than that of the "high adaptive/low dependence" group. [Conclusion] The results of this study suggest that the relationship with friends in academic situations was associated with self-regulated learning ability and academic performance, while the relationship with teachers itself may hardly affect self-regulated learning ability and academic performance. It was also suggested that students who were able to request appropriate help-seeking may have higher self-control ability.

Key words: self-regulated learning, academic help-seeking, self-control

要旨: [目的]本研究は、援助要請対象者(対友人・対教員)別に適応的要請と依存的要請の各得点の組み合わせと心理的特性および学業成績との関連を探索的に検討することを目的とした。[対象と方法]対象は、A大学理学療法学科の1年生とした。心理的特性は、学業的援助要請、自己調整方略、協同作業認識およびセルフコントロールをWeb形式のアンケートにて調査した。学業成績は、2022年度前期試験のGrade point average (GPA)を使用した。友人および教員に対する適応的要請と依存的要請得点の中央値から組み合わせた4群(適応低/依存高群・適応低/依存低群・適応高/依存高群・適応高/依存低群)に分類し、各心理的尺度および学業成績との関連を検討した。統計解析は、一元配置分散分析およびKruskal-Wallis検定を用い、4群間はBonferroni法にて多重比較検定を行った。[結果]対友人における結果、「適応低/依存高」群と比較して、「適応高/依存低」群および「適応高/依存高」群の努力調整方略、モニタリング方略、認知的方略が有意に高値を示した。セルフコントロールは、「適応低/依存高」群と比較して「適応高/依存低」群のみ有意に高値であった。「適応高/依存低」群のGPAは、その他の3群よりも有意に高値を示した。対教員における結果、「適応高/依存低」群と比較して、その他の3群のセルフコントロールのみ有意に低値を示した。[結語]学業場面における友人との関わり方が自己調整学習能力および学業成績と関連する一方で、教員との関わり方自体が自己調整学習能力や学業成績に影響することは少ない可能性が示された。また、適切な援助要請行動がとれる学生では、セルフコントロール能力が高いことが示唆された。

キーワード: 自己調整学習, 学業的援助要請, セルフコントロール

1) 令和健康科学大学 リハビリテーション学部 理学療法学科: 福岡県福岡市東区和白丘2丁目1-12 (〒811-0213)

受付日 2023年9月13日 受理日 2023年11月20日

I. はじめに

日本の学校教育では、学習に対する主体性や学習意欲を高めるといった自ら学び考える力の育成が求められている。文部科学省は「学力三要素」として「基礎的な知識・技能」「思考力・判断力・表現力等の能力」「主体的に学習に取り組む態度」を提唱し、この三要素は、認知スキル（学力）だけでなく、非認知スキルの側面も含むとしている^{1,2)}。OECDでも同様に、個人のスキルを「認知スキル」と「非認知スキル」の二つに分けており、認知スキルを「知識」「思考」「経験」を獲得する能力とし、非認知スキルは「長期的目標の達成」「他者との協働」「感情を管理する能力」の3側面としている³⁾。

学習に主体的にかかわる力が必要とされる現状から、日本における教育研究において「自己調整学習」という概念のもと研究が蓄積されている^{4,5)}。自己調整学習とは、「学習者が、メタ認知、動機付け、行動において、自分自身の学習過程に能動的に関与していること」と定義づけられており⁶⁾、自ら学び考える力と同様に捉えられている。また、Bundura⁷⁾は、自己調整学習における「社会認知モデル」を提唱し、自己調整学習が上達する為の技術として、モデリング、仲間が教え合うこと、協同学習などをあげており、他者との関わりを重視している。特に「モデリング」という観点から、学習場面における他者の存在は、学習者が自己調整能力を発達させ、自己効力感を高めるための資源として重要な役割をもっているとしている。以上の観点からも、自己調整学習は、内的過程のみならず、仲間、教師に対する援助要請のような外部環境との相互作用から創出される社会的学習の側面も含むと考えられる。

学習者が独力で解決できない課題に直面した際に、問題解決のために援助を求める行為を「学業的援助要請」といい、自己調整学習方略の中の重要な要素とされている⁸⁾。野崎らは、学業的援助要請を「適応的要請」「依存的要請」「要請回避」の3つに分類し⁸⁾、適応的要請（援助要請者が主体的に問題解決に取り組み、援助要請の必要性の吟味を十分に行った上でヒントや解き方の説明を要求する行動）の高い学生は自己調整学習能力が高い一方で、依存的要請（援助要請の必要性の吟味を十分に行わず問題解決を援助者にゆだね、答えを要求する行動）の高い学生は自己調整学習能力が低いことを報告している⁹⁾。それに加えて、援助対象者が友人か教員かによって自己調整学習への影響が異なることが報告されている¹⁰⁾。一方、要請回避と自己調整学習能力との関連をみた報告はなく、要請回避が必ずしも能力が低いから回避するわけではないことから、要請回避の結果については解釈が難しいとされている⁹⁾。

学習者が求める援助要請行動の特性を考慮すると、課題の難易度や学習意欲に応じて適応的要請と依存的要請は混在している可能性がある。しかしながら、先行研究では、適応的要請と依存的要請の各得点と自己調整学習との関連を別々に検討しているため、両者が混在する学生の特性を把握できていない。そのため、適応的要請と依存的要請を組み合わせる自己調整学習との関連を検討する必要がある。さらに、学業的援助要請と社会的学習において重要視されている協同学業認識やセルフコントロールとの関連^{11,12)}、および学業的援助要請が学業成績に及ぼす影響を検討した研究は数少ない。そこで、本研究は、援助要請対象者別に適応的要請と依存的要請の各得点の組み合わせから4群に分類し、心理的特性および学業成績との関連を探索的に検討することを目的とした。

II. 対象と方法

1. 対象

対象は、A大学、理学療法学科に所属する1年生とした。学生には、研究の協力が得られない場合でも学生生活に影響しないことを書面にて説明し、Web形式のアンケート記入をもって同意することとした。なお、本研究は、令和健康科学大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：22-010）。

2. 方法

本研究の質問紙は、Google formsを用いたWebアンケートとし、2022年8月の前期試験終了後に実施した。

1) 心理的尺度：学業的援助要請

学業的援助要請は、野崎⁸⁾による「学業的援助要請形態」の下位尺度である適応的要請・依存的要請を用いた。本質問紙は、友人および教員に対する適応的援助要請4項目（‘自分で考えてどうしてもわからなかったときだけ友達に質問します’‘教科書などを使って自分でいろいろ調べたあとで友達に質問します’‘私は友達に質問するときその問題の答えではなく解くためのヒントを教えてください’‘よくわからない勉強の内容について詳しく説明してくれるよう友達に頼みます’）、依存的要請4項目（‘わからない問題にであったときはすぐに友達に答えを聞きます’‘友達に質問するとき問題を解くためにヒントよりは答えを聞きます’‘自分でもう少し考えたらわかる問題でも友達に質問します’‘わからない問題や内容にであったら自分でいろいろ調べる前に友達に助けを求めます’）から構成されている。教員の質問紙は、友人を教員に置き換えて使用する。また、‘1:全くあてはまらない～5:とてもあてはまる’の5件法で回答を求めるものである。なお、「要請回避」に関しては解釈が難しいことから⁹⁾、本研究では除外して検討することとした。

2) 心理的尺度：その他

自己調整学習方略は、藤田¹⁰⁾による「自己調整方略尺度」を用いた。本質問紙は、18項目4因子(努力調整方略5項目・プランニング方略3項目・モニタリング方略5項目・認知的方略5項目)から構成されている。各項目は5件法で合計点が示され、得点が高いほど自己調整学習能力が高いとされている。協同作業認識は、長濱ら¹¹⁾による「協同作業認識尺度」を用いた。本質問紙は、18項目3因子(協同効用9項目・個人志向6項目・互惠懸念3項目)から構成されている。各項目は5件法で、個人における3因子の傾向の重み付けを各因子の合計点で把握するものである。セルフコントロールは、尾崎ら¹²⁾による「セルフコントロール尺度短縮版」を用いた。本質問紙は、13項目から構成されている。各項目は5件法で、得点が高いほどセルフコントロール能力が高いとされている。

3) 学業成績

学業成績の評価には、2022年度前期試験(8月)のGrade point average (GPA)を使用した。

4) 統計解析

友人および教員に対する適応的要請と依存的要請得点は、それぞれ中央値以上と中央値未満で高低の2群に分類し、それぞれを組み合わせた4群(適応低/依存高群・適応低/依存低群・適応高/依存高群・適応高/依存低群)と心理的特性および学業成績との比較検討を行った。統計解析は、一元配置分散分析およびKruskal-Wallis検定を行い、4群間の比較検討には、Bonferroni法による多重比較検定を用いた。統計ソフトはSPSS Ver.29 (IBM社製)を使用し、有意水準は $p<0.05$ とした。

III. 結果

本研究の対象者76名のうち、回答が得られなかった1名を除いた75名(男性51名、女性24名、年齢 18.5 ± 0.9 歳：平均 \pm 標準偏差)を分析対象とした。友人に対する適応的・依存的学業的援助要請の中央値は、それぞれ15.0、12.0であった。教員に対する適応的・依存的学業的援助要請の中央値は、それぞれ15.0、11.0であった。

友人に対する適応的・依存的学業的援助要請(以下：対友人)の組み合わせは、「適応低/依存高」群：22名(30%)、「適応低/依存低」群：8名(10%)、「適応高/依存高」群：21名(28%)、「適応高/依存低」群：24名(32%)であった(図1)。対友人における適応的・依存的援助要請の組み合わせと心理的特性および学業成績との関連を検討した結果(表1)、「適応低/依存高」群と比較して、「適応高/依存低」群の努力調整方略・モニタリング方略・認知的方略およびセルフコントロールの得点が有意に高値を示した($p<0.05$)。また、「適応低/依存高」群と比較して、「適応高/依

存高」群の努力調整方略・モニタリング方略・認知的方略の得点が有意に高値を示した。「適応高/依存低」群のGPAは、その他の3群よりも有意に高値を示した($p<0.05$)。協同作業認識においては、各群間で有意差を認めなかった。

教員に対する適応的・依存的学業的援助要請(以下：対教員)の組み合わせは、「適応低/依存高」群：18名(24%)、「適応低/依存低」群：18名(24%)、「適応高/依存高」群：23名(31%)、「適応高/依存低」群：16名(21%)であった(図2)。対教員における適応的・依存的援助要請の組み合わせと心理的特性および学業成績との関連を検討した結果(表2)、セルフコントロールの得点は、「適応高・依存低」群と比較して、その他の3群において有意に低値を示した($p<0.05$)。しかしながら、その他の項目については各群間で有意差を認めなかった。

IV. 考察

本研究は、自己調整学習方略の中でも重要とされている「学業的援助要請」に着目し、援助対象者別に適応的要請と依存的要請の各得点の組み合わせと心理的特性および学業成績との関連を探索的に検討することを目的とした。本研究の結果、対友人における学業的援助要請において、「適応低/依存高」群と比較して、「適応高/依存低」群の努力調整方略・モニタリング方略・認知的方略の得点およびセルフコントロールが有意に高値を示した。また、「適応低/依存高」群と比較して、「適応高/依存高」群の努力調整方略・モニタリング方略・努力調整方略の得点が有意に高値を示した。さらに、「適応高/依存低」群のGPAは、その他の3群よりも有意に高値を示した。一方、対教員における学業的援助要請では、「適応高/依存低」群は、その他の3群(「適応低/依存高」、「適応低/依存低」、「適応高/依存高」)と比較して、セルフコントロールの得点のみ有意に高値を示した。

学業場面における援助要請行動については、援助要請を量的な観点だけでなく、行動の質を考慮すべきだと言われている^{8,13)}。野崎⁸⁾は、学業的援助要請における質として適応的要請・依存的要請・要請回避の3形態に分類し、援助要請対象者を友人と教員に区分した。中学生対象に実施した調査では、適応的要請と依存的要請について、教員より友人に対する支援要請が多いことを明らかにしている^{8,14)}。また、瀬尾も同様に中学生および高校生の援助要請の質について検討した結果、適応的援助要請においては、学習内容の意味を理解しようとする学習観と関連しており、依存的援助要請では、丸暗記で対処する学習方法で結果を重視するような学習観と関連が深いことを報告している。以上のことから、学習に対する主体性や学習意欲を高め、自ら学び考える力を育成するためには、依存

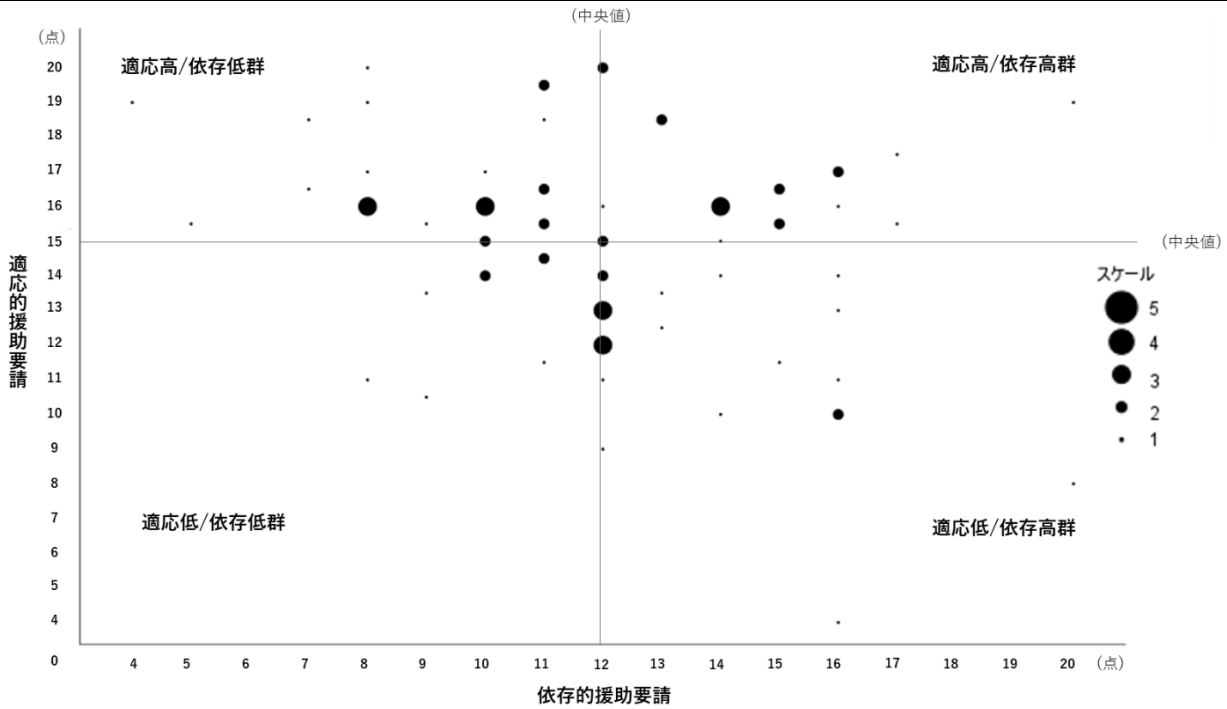


図1 友人に対する適応的・依存的援助要請得点の散布図

表1. 友人に対する適応的・依存的援助要請の組み合わせと心理的特性および学業成績との関連性

	適応低/依存高 n=22	適応低/依存低 n=8	適応高/依存高 n=21	適応高/依存低 n=24
自己調整学習方略				
努力調整方略	17.9 (2.9)	18.7 (3.2)	20.3 (2.6) ^a	21.1 (2.0) ^a
プランニング方略	8.7 (3.2)	9.3 (3.1)	9.4 (3.2)	9.8 (3.2)
モニタリング方略	17.6 (3.3)	19.1 (2.5)	20.2 (2.2) ^a	20.3 (2.7) ^a
認知的方略	17.0 (2.8)	19.1 (2.3)	19.0 (2.2) ^a	20.4 (2.5) ^a
協同作業認識				
協同効用	34.8 (5.6)	36.9 (3.3)	37.9 (4.6)	37.4 (4.5)
個人志向	18.1 (2.6)	18.8 (3.5)	17.1 (3.9)	17.9 (2.7)
互惠懸念	6.3 (2.5)	5.8 (1.4)	6.5 (2.5)	5.7 (1.8)
セルフコントロール	33.4 (5.2)	38.6 (3.9)	36.5 (6.7)	41.3 (8.0) ^a
GPA	2.15 (0.40)	2.00 (0.58) ^b	2.18 (0.51) ^b	2.55 (0.44) ^a

値は平均（標準偏差）で示している。GPA：Grade point average

^a p<0.05 vs. 適応低/依存高, ^b p<0.05 vs. 適応高/依存低

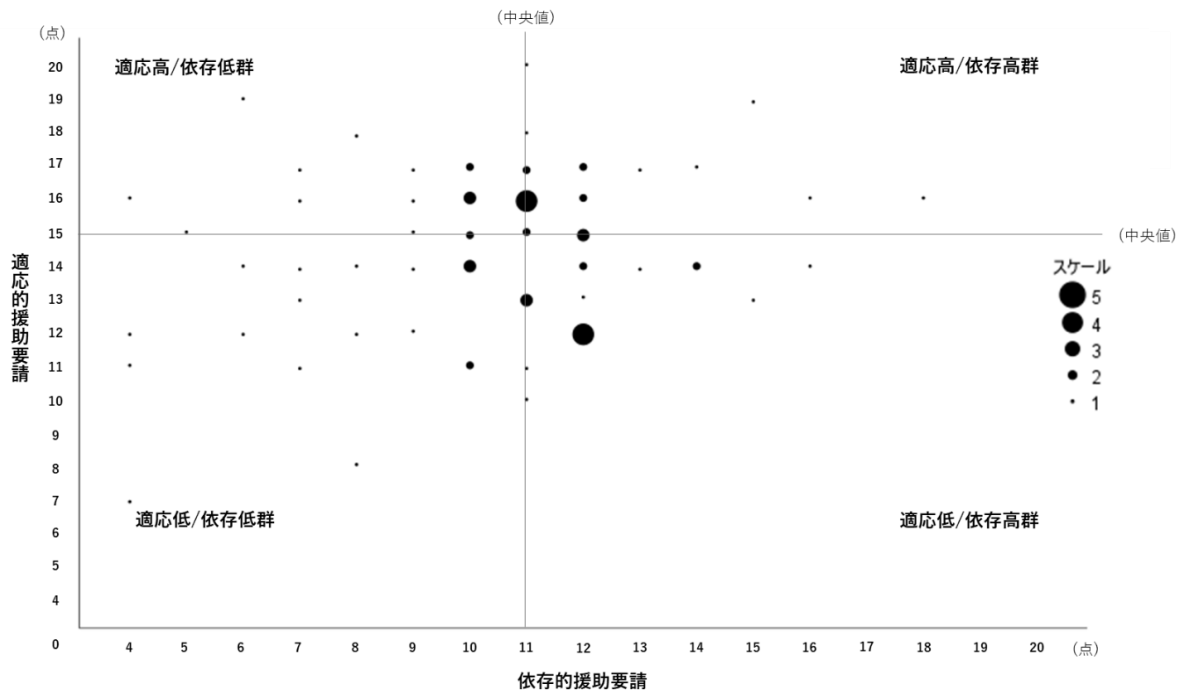


図2 教員に対する適応的・依存的援助要請得点の散布図

表2. 教員に対する適応的・依存的援助要請の組み合わせと心理的特性および学業成績との関連性

	適応低/依存高 n=18	適応低/依存低 n=18	適応高/依存高 n=23	適応高/依存低 n=16
自己調整学習方略				
努力調整方略	19.8 (3.2)	18.9 (2.8)	19.5 (2.6)	20.6(2.8)
プランニング方略	9.4 (2.9)	8.2 (3.1)	9.4 (3.2)	10.2(3.4)
モニタリング方略	17.9 (3.6)	18.6 (2.2)	20.0 (2.5)	20.8(2.6)
認知的方略	18.1 (2.4)	18.7 (3.0)	18.8 (2.9)	19.9(2.7)
協同作業認識				
協同効用	35.8 (5.0)	36.3 (5.3)	37.1 (4.8)	37.6(4.5)
個人志向	17.7 (2.0)	18.7 (3.3)	17.5 (3.8)	17.6(3.0)
互惠懸念	6.5 (1.9)	6.1 (1.9)	6.4 (2.7)	5.2(1.9)
セルフコントロール	37.2 (5.4) ^b	33.8 (6.8) ^b	35.1 (5.8) ^b	44.4(6.0)
GPA	2.3 (0.4)	2.2 (0.6)	2.2 (0.5)	2.4 (0.5)

値は平均（標準偏差）で示している。GPA：Grade point average

^b p<0.05 vs. 適応高/依存低

的援助要請を減少させ、適応的援助要請を習得していくことが重要であると考えられる。適応的援助要請を獲得するためには、自ら学び考える力である自己調整学習方略の獲得が必要であるとされており^{8,10)}、初学者では他者の観察や模倣の段階を経て自己調整能力が自律的に働くこととされている。さらにその発達段階において、適切なフィードバックが影響するとされていることから¹⁵⁾、学生の特性を捉えた適切な言葉かけなどの支援が重要である。適応的援助要請を獲得するためには、自ら学び考える力である自己調整学習方略の獲得が必要であるとされており^{8,10)}、初学者では他者の観察や模倣の段階を経て自己調整能力が自律的に働くこととされている。さらにその発達段階において、適切なフィードバックが影響するとされていることから¹⁵⁾、学生の特性を捉えた適切な言葉かけなどの支援が重要である。

学業的援助要請と自己調整学習方略の関連においては、藤田による大学生を対象にした調査で、対友人・対教員における適応的援助要請と自己調整方略尺度の努力調整方略、モニタリング方略、認知的方略との間に有意な正の相関が認められた¹⁰⁾。一方、依存的援助要請との相関については、対友人においてのみ努力調整方略、モニタリング方略との間に有意な負の相関が確認され、大学生になると教員に対する依存的援助要請を控える傾向にあると述べている¹⁰⁾。また、学業的援助要請と学業成績の関連については、中学生を対象とした調査では適応的援助要請は GPA と正の相関を示すこと、小学校から中学校への移行期においては、友人に対する依存的援助要請の増加が学業成績の低下を予測することを報告している^{16,17)}。本研究においても、「適応低/依存高」群と比較して、「適応高/依存低」群の努力調整方略・モニタリング方略・認知的方略の得点および GPA が対友人においてのみ高値を示したことから先行研究を支持する結果であった。このことから、理学療法学専攻学生においても、友人に対する依存的援助要請が低く、適応的援助要請が高い学生は、自身の学習活動への動機付けを高め（努力調整方略）、自身の学習方略を客観的に把握し（モニタリング方略）、自身に最適な学習方略を認知したうえで主体的に取り組むことができることで（認知的方略）、学業成績の向上に繋がっている可能性が示めされた。また、本研究では、「適応低/依存高」群と比較して、「適応高/依存高」群においても努力調整方略・モニタリング方略・認知的方略の得点が対友人において有意に高値を示した。学業的援助要請において依存的援助要請から適応的援助要請へと変化していく可能性が報告されているが¹⁸⁾、依存的な援助要請傾向にある学生が即座に適応的な援助要請へと移行するのではなく、自身の得意なことであれば適応的な援助行動をとる一方で、不得意なことに関しては依存的な援助行動をとるなど課題場面に応じた行動特性の違いが考えられ、援助

要請行動には両者が混在する時期がある可能性がある。本研究の結果、「適応高/依存高」群の自己調整学習能力は高かったものの、「適応高/依存低」群よりも GPA が低かったことから、課題に応じて適切な援助要請行動へと移行できるような友人関係を支援していく必要があることが示唆された。

本研究の結果、援助要請対象者が友人と教員では異なる特性を示した。先行研究においても友人および教員における援助要請については、教員よりも友人に対して使用することが多く、教員に対する依存的援助要請は自己調整学習方略との相関がないことが報告されている¹⁰⁾。これまでの先行研究を考慮すると^{10,13,14)}、学業場面において友人との関わり方が自己調整学習能力を高め、学業成績に影響する一方で、教員との関わり方自体が自己調整学習能力や学業成績に影響することは少ない可能性が示めされた。しかしながら、本結果は、大学入学後半年経過後に調査したものであることから、学年が上がるにつれて教員との関わり方も変化していく可能性があるため、経時的に調査していく必要がある。

本研究では、先行研究に加えて、協同作業認識およびセルフコントロールとの関連を検討した。その結果、協同作業認識においては各群間に有意差を認めなかった。長濱らは、他者と協力し合い、助け合うことの意味とその働きについての認識を高めなければ、協同で学習する際に効果が低いことや、大学生は大学入学時から協同作業を肯定的に捉えている可能性を報告している¹¹⁾。本研究では、友人および教員ともに各群間に有意差を認めなかったことから、理学療法学専攻学生において協同作業認識と学業的援助要請との関連は認められなかった。一方、セルフコントロールにおいては、対友人および対教員の「適応高/依存低」群の得点が有意に高値を示した。特に対友人における結果から、自己調整学習能力が高く学業成績も高い学生は、セルフコントロール能力が高い結果となり先行研究を支持する結果となった。セルフコントロールとは、「直接的な外的強制力がない場面で、自発的に自己の行動を統制すること」とされており¹⁹⁾、学力や IQ といった認知能力とは異なる能力であることから、非認知能力に分類される。非認知能力の三つの構成要素である「目標の達成」「他者との協働」「感情のコントロール」のうち、特に「目標の達成」に深く関わっているとされ²⁰⁾、自己制御が優れている人ほど、学業成績がよく対人関係も良好であることが報告されている²¹⁾。さらに、セルフコントロール能力は、大学生になってからでも変化することが示唆されている²²⁾。大学生の学習活動においては、目標達成のために自分の意志で計画を立て学習を進めていく必要があることから¹⁹⁾、セルフコントロール能力のような非認知能力を大学生活の中で育てていくことが教育目標の重要な一つであると言える。

近年、理学療法教育モデル・コア・カリキュラム（公益社団法人日本理学療法士協会）の中で、卒前教育の到達目標は、「ある程度の助言を受けながら基本的な理学療法を実施できるとともに自ら学ぶ力を育てること」とされた²³⁾。また、医学教育においても、臨床現場という構造化されていない環境下で学習課題を指導者に限らず多職種の助言を頼りながら学習を行う必要があることから自己調整学習が注目されている²⁴⁾。このことから、大学教育の中で、臨床場面に活かされるような認知スキルと非認知スキルを向上できる教育環境を整備していくことが必要であると言える。

本研究にはいくつかの限界点がある。1つ目は、本研究は横断研究であるため、援助要請行動と各因子との因果関係は不明なままである。2つ目に、「適応低/依存低」群は、学業成績において低い値を示したことから、他者への援助要請をしない傾向を考えると問題を抱えている可能性があるが、本研究ではn数が少なかったことから結果の解釈ができなかったことである。3つ目に、本研究では「要請回避」について検討していないため、要請回避に関連する因子の検討を今後行っていく必要がある。4つ目に、本研究は理学療法学科に所属する1年生のみを対象とした結果であるため、他大学および学年への一般化はできないことである。本研究で使用した各心理尺度の平均値を示した先行研究がないため、他集団との比較はできなかったが、セルフコントロールに関しては、尾崎らが報告した一般大学生集団の平均得点（35.9±7.1点）よりも、本集団は高かった（37.3±7.1点）。今後は、援助要請行動、自己調整学習能力およびセルフコントロール能力の経時的な変化や因果関係を縦断研究により明らかにしていく必要がある。

利益相反と研究助成費

論文投稿に関連し、開示すべきCOIの関係にある企業・組織及び団体等はない。

引用文献

- 1) 文部科学省：学習指導要領「生きる力」。
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/genko/1300857.htm（閲覧日 2022年12月3日）
- 2) ヘックマン,J.J. 古草秀子（訳）：幼児教育の心理学 東洋経済新法社（Heckman,J.J.Giving kids a fair chance.Cambridge,MA:MIT Press.）
- 3) Organization for Economic Cooperation and Development (OECD)(2015).Skills for social progress: The power of social and emotional skills. 経済協力開発機構（OECD）：社会情動的スキル学習に向かう姿勢。ベネッセ教育総合研究所。2018.
- 4) 藤田正、富田翔子：自己調整学習に及ぼす学習動機および学習方略についての認知的影響。奈良教育大学 教育実践開発研究センター研究紀要, 21 : 81-87, 2012.
- 5) 梅本貴豊、伊藤崇達、田中健史朗：調整方略、感情のおよび行動的エンゲージメント、学習成果の関連。心理学研究, 87(4) : 334-342,2016.
- 6) Barry J. Zimmerman : Becoming a self-regulated learner: Which are the key subprocesses. Contemporary Educational Psychology, 11(4) : 307-313,1986.
- 7) Bundura,A : Social foundations of thought and action: A social cognitive theory. New jersey: Prentice Hall,1986.
- 8) 野崎秀正：生徒の達成目標志向性とコンピテンスの認知が学業的援助要請に及ぼす影響—抑制態度を媒介としたプロセスの検証—。教育心理学研究, 51:141-153,2003.
- 9) 下山晃司、桜井茂男：学業場面における援助要請回避理由と援助要請傾向の関連。筑波大学心理学研究, 26 : 195-204,2003.
- 10) 藤田正：大学生の自己調整学習方略と学業的援助要請との関係。奈良教育大学紀要, 59:47-54,2010.
- 11) 長濱文与、安永悟、関田和彦・他：協同作業認識尺度の開発。教育心理学研究, 57(1):24-37, 2009.
- 12) 尾崎由佳、後藤崇志、小林麻衣：セルフコントロール尺度短縮版の邦訳および信頼性・妥当性の検討。心理学研究, 10 : 144-154,2016.
- 13) 永井智：援助要請スタイル尺度の作成-縦断調査による実際の援助要請行動との関連から-。教育心理学研究, 61 : 44-55, 2013.
- 14) 瀬尾美紀子：自律的・依存的援助要請における学習観とつまづき明確化方略の役割-多母集団同時分析による中学・高校生の発達差の検討-教育心理学研究, 55 : 170-183, 2007.
- 15) 自己調整学習研究会：自己調整学習理論と実践の新たな展開へ、北大路書房, 73-92, 東京, 2012
- 16) Ryan, A. M., & Shin, H. : Help-seeking tendencies during early adolescence: An examination of motivational correlates and consequences for achievement. Learning and Instruction, 21 : 247-256, 2011.
- 17) Ryan, A. M., & Shim, S. S. : Changes in help seeking from peers during early adolescence: Associations with changes in achievement and perceptions of teachers. Journal of Educational Psychology, 104 : 1122-1134. 2012.

- 18) 野中嘉代子・玉利誠：学習記録活動が理学療法専門学校生の学業的援助要請に与える影響．理学療法科学, 37(3)：281-284, 2022.
- 19) 藤田正、野口彩：大学生のセルフ・コントロールと学習課題先延ばし行動の関係．教育実践総合センター研究紀要, 18：101-106, 2009.
- 20) 小塩真司：非認知能力-概念・測定と教育の可能性, 北大路書房, 45-61, 2021.
- 21) Denise T. D. de Ridder, Gerty Lensvelt-Mulders, Catrin Finkenauer, F. Marijn Stok and Roy F. Baumeister：Taking stock of self-control: A meta-analysis of how trait self-control relates to a wide range of behaviors. *Personality and Social Psychology Review*,16(1)：79-99, 2012.
- 22) Leah S. Richmond-Rakerd, Avshalom Caspi, Antony Ambler：Childhood self-control forecasts the pace of midlife aging and preparedness for old age. *Proceedings of the National Academy of Science*,118(3)：1-11, 2020.
- 23) 公益社団法人日本理学療法士協会：理学療法学教育モデル・コア・カリキュラム.
http://japanpt.or.jp/upload/japanpt/obj/files/about/modelcorecurriculum_2019.pdf (閲覧日 2023年2月27日)
- 24) 松山泰：医学部教育における自己調整学習力の育成専門職アイデンティティ形成からの視座, 福村出版, 15-144, 東京, 2021.